

秋 風 曲

小 笠 原 秀 實

冴ゆる日は生きたるまゝ、のこの我を骨ミ見なして秋風よ吹け

峰々をめぐる秋風はてついに我が白菊の花びらに來ぬ

何ものに心ミめむ秋の野のくまなき風に色はなきかな

秋風に驚きつらむ鳥の音の夕日の山にしみわたるなり

吹き磨く秋風同じ水ミ野の中一すじを堤はてなし

秋風の心の奥に觸れなむミ山の尾めぐる水に來しかな

數多き迷をつみし魂にさやけく秋の風わたり來ぬ

一ふさの落穂を拾ひ野の道を涙に濡れて踏む心なり

何ごみにこだはるもの、影ならむ枯れ行く野邊に残るひミ花